

ヒンディー語における複数の所有構文の併存について

今村 泰也

麗澤大学大学院博士後期課程／国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員

1. はじめに

ヒンディー語には英語の *have* に相当する動詞がなく、叙述所有（X has/owns Y）は、格／後置詞と存在動詞 *honā* を用いて、「X の近くに Y がある」（所格構文）、「X の Y がある」（属格構文）、「X に Y がある」（与格構文）のように自動詞文で表される（次例(1)-(3)）¹。

(1) *rameś=ke pās do kāreṃ haiṃ.*

Ramesh=GEN.OBL near two car.F.PL.NOM be.PRS.3PL

‘Ramesh has two cars.’

(Kachru 1980: 122)

(2) *rām=kā ek beṭā hai.*

Ram=GEN.M.SG one son.M.SG.NOM be.PRS.3SG

‘Ram has one son.’

(Mohanani 1994: 177)

(3) *harek=ko rozgār=kī chūṭ hai.*

everyone=DAT employment=GEN.F freedom.F.SG.NOM be.PRS.3SG

‘Everyone has freedom to choose his occupation.’

(古賀・高橋 2006: 1165)

各構文の使用条件の概略は表 1 の通りであり、所有構文とそれが表す所有概念（所有の種類）は概ね相補分布している（このうち、X *ke pās* Y *honā* 「X の近くに Y がある」の用法は拡張している）。

構文 \ 所有概念	具体的所有 (例：本、お金、車)	分離不可能所有 (例：身体部分、親族)	抽象的所有 (例：時間、権利、熱)
X <i>ke pās</i> Y <i>honā</i> (所格構文)	+	一部の名詞は+	一部の名詞は+
X <i>kā</i> Y <i>honā</i> (属格構文)	—	+	—
X <i>ko</i> Y <i>honā</i> (与格構文)	—	—	+

表 1 ヒンディー語の所有構文とそれが表す所有概念

ヒンディー語の複数の所有構文とその使用条件は先行研究でほぼ明らかにされているが、その成立過程に関する研究・記述は未見である。

世界の言語の所有構文を包括的に扱った Heine (1997) は、ある言語に二つ以上の所有構文があることはごく普通のことであり、それらが競合することもあるが、一般的には新たな所有構文の発生に伴い、既存の所有構文が次第に特定の用法、とりわけ抽象的所有に限られるようになると述べている (p.109)。また、分離不可能所有、抽象的所有といった所有概念は具体的所有より後に発達するため²、分離不可能所有、抽象的所有を表す構文は古い可能性があるとして述べている (pp.232-233)。

¹ 発表者は今村 (2009, 2010) で他の構文も所有構文と見なして考察しているが、本発表では (どの先行研究でも扱われている) 代表的な 3 つの構文を取り上げた。

² 所有概念は、physical > temporary > permanent > inalienable, abstract の方向へ発達することが予測される (Heine 1997: 233)。なお、本稿では physical, temporary, permanent の三つを具体的所有としてまとめている。

本発表では、こうした類型論的な傾向に照らして、ヒンディー語における複数の所有構文の併存状況は歴史的に重層化した結果であるという仮説を立て、インド・アリア語の所有構文の変遷を示す。

2. 初期インド・ヨーロッパ語の所有構文

インド・ヨーロッパ祖語には所有を表す‘have’動詞はなく、初期インド・ヨーロッパ語では所有者を与格に置き、存在動詞を用いる *mihi est* 「私に（～が）ある」構文で所有を表した。また、多くの言語で属格構文も見られる（Bauer 2000）。次例(4)はラテン語、(5)は古代ギリシア語の例である。

(4) Latin

mihi est liber.
1SG.DAT be.PRS.3SG book.SG.NOM

‘I have a book.’

(Heine 1997: 32)

(5) Ancient Greek

hèmin oinos estin.
1PL.DAT wine.NOM be.PRS.3SG

‘We have wine.’

(Nuchelmans 1985: 102 quoted by Stassen 2009: 51)

ラテン語では古ラテン語期（75 BC 以前）に *habere* ‘to hold > to have’ を用いた他動詞所有構文が現れた（e.g. *habeo librum* ‘I have a book’）。*habere* 構文の使用は最初、具体的所有に限られていたが、比較的早く分離不可能所有をカバーするようになり、抽象的所有の例は大カトー（234 BC-149 BC: e.g. *spem habere* ‘to have hope’）およびキケロ（106 BC-43 BC: e.g. *timorem habere* ‘to have fear’）の著作に現れた。一方、既存の *mihi est* 構文はラテン語散文の歴史全体を通じて抽象的所有と強く関係した（Löfstedt 1963: 75-77 quoted by Heine 1997: 109）。

3. 古期インド・アリア語（OIA: 1500 BC-600 BC³）の所有構文

古い段階のインド・アリア語（ヴェーダ語、サンスクリット語）で所有は与格構文あるいは属格構文で表され、動詞は *as-* 「ある」、*bhū-* 「なる、ある」、*vidyate* 「ある」などが用いられた（動詞が省略される場合もある）。次例(6)は OIA の最古層の文献『リグ・ヴェーダ』（1200 BC 頃編纂）の一節で、与格構文が使われている。

(6) *gambhīre cid bhavati gādham asmai.*
depth.N.SG.LOC even be.PRS.P.3SG ford.N.SG.NOM 3SG.DAT

‘Even in deep water he has a ford.’

(*R̥gveda* 6.24.8)

以下の例では属格構文が使われている（(7)-(8)はブラーフマナ文献（900 BC-700 BC）、(9)は文法書の用例）。

(7) *tasya śataṃ jāyā babhūvuh.*
3SG.GEN hundred.N.SG.NOM wife.F.SG.NOM become.PFV.P.3PL

‘He had hundred wives.’

(*Aitareya Brāhmaṇa* 7.13.1)

³ インド・アリア語の時代区分は研究者によって多少異なるが、ここでは Kachru (2006: 1) によった。

(8) *manor ha vā rṣabha āsa.*
 Manu.GEN EMPH EMPH bull.M.SG.NOM be.PFV.P.3SG

‘Manu had a bull.’

(Śatapatha Brāhmaṇa 1.1.4.14)

(9) *tava putrāṇām dhanam na bhavati.*
 2SG.GEN son.M.PL.GEN money.N.SG.NOM NEG be.PRS.P.3SG

‘Your sons have no money.’

(Coulson 2006: 66)

サンスクリット語の与格の領域は特に属格によって強く侵食されていった (Taraporewala 1967 quoted by Rosén 1989: 33)。したがって、サンスクリット語で所有が属格構文で表されることが多いといえども、与格構文がインド・アーリア語の所有構文の原型と考えられる (Bauer 2000: 174)。

4. 中期インド・アーリア語 (MIA: 600 BC-1000 AD) における格の融合と後置詞の発達

プラークリット語 (俗語) を代表するパーリ語では所有は以下のように表される。

(10) *puttā=me⁴ na atthi⁵.*
 son.M.PL.NOM=1SG.DAT NEG be.PRS.3SG

‘I have no sons.’

(Duroiselle 1997: 155)

パーリ語では格の区別が衰退し、与格と属格の形はほとんど常に同じになった。また、MIA の後期、アパブランシャ語では格の融合が進み、OIA の 7 格 (呼格を除く) から 4 格 ((i)主格/対格、(ii)属格/与格/奪格、(iii)具格、(iv)所格) に減少した。一方、語と語の文法関係を示すために後置詞が発達した。例えば、*pās-i*⁶ ‘side, region of the ribs’ (< OIA *pārśva*) は近接 (in the proximity/nearness of) を意味するようになり、最終的には後置詞 (at/to) に変化した (Bubenik 1998: 81-82)。(11)は複合語 N-*pāsi* の例、(12)は絶対形 *pāsu* (先行する名詞は属格をとる) の例である。

(11) *gayau guru-pāsi.*
 go.PP teacher-side.LOC

‘He went to the side of the teacher. > He went to (the proximity of) the teacher.’

(Kumārapālapratibodha 101.1 [1195 AD])

(12) *vasudevaho pāsu gau.*
 Vasudeva.GEN proximity go.PP

‘He went to (the proximity of) Vasudeva.’

(Riṭṭhanemicariu 4.7.8 [8th century])

なお、ヒンディー語では、(12)は複合後置詞 *ke pās* で次のように表される。

(13) [*vah*] *vasudeva=ke pās gayā.*
 3SG Vasudeva=GEN.OBL near go.PFV.M.SG

‘He went to (the proximity of) Vasudeva.’

以上のように、もともとは語彙的要素であった *pās-i* ‘side, region of the ribs’ は具体的な意味が希薄になり、文法的要素に変化した (= 文法化した)。

⁴ =*me* は 1 人称代名詞の付帯形 (enclitic form) で、与格も属格も同形であるが、Duroiselle (1997: 155) は所有を与格の用法に分類している。

⁵ 所有構文では所有物が複数でも動詞は通常、単数形をとる (Duroiselle 1997: 155)。

⁶ -*i* は所格接尾辞 (Bubenik 1998: 81)。

5. 新期インド・アリア語 (NIA: 1000 AD-present) の格と後置詞

後期 MIA の 4 つの格は NIA のはじめに直格 (主格) と斜格 (後置格) の 2 つに収斂した (i)主格 / 対格 > 直格、(ii)属格 / 与格 / 奪格 > 斜格)。そして、以前の格の機能を果たすものとして後置詞が発達した (表 2。各後置詞の語源については Bubenik 2007 を参照)。

対格	>	= <i>ko</i>	属格	→	= <i>kā</i>
与格			奪格	>	= <i>se</i>
所格	>	= <i>par</i> 'at, on'	具格		
		= <i>mē</i> 'in'			

表 2 OIA の格とヒンディー語の後置詞 (Bubenik 2007: 11-12 を一部改変)

NIA の一つであるヒンディー語では、はじめに述べたように与格構文 $X \textit{ko} Y \textit{honā}$ 「X に Y がある」、属格構文 $X \textit{kā} Y \textit{honā}$ 「X の Y がある」、所格構文 $X \textit{ke pās} Y \textit{honā}$ 「X の近くに Y がある」が所有を表す構文になっている。*ke pās* は属格後置詞 *kā* の斜格形 *ke* と副詞 *pās* からなる複合後置詞で、 $X \textit{ke pās} Y \textit{honā}$ の (所有の意味の) 構文化は上記の *pās-i* の文文化 (語彙的要素から文法的要素への変化) よりも一段と進んだ文法化であり、上例(11)-(12)より後の変化と考えられる。

6. まとめ

ヒンディー語における複数の所有構文の併存はインド・アリア語の所有構文の変遷を反映し、重層化したものと考えられる。すなわち、歴史的に与格構文が最も古く、次いで属格構文、所格構文が現れた (図 1)。

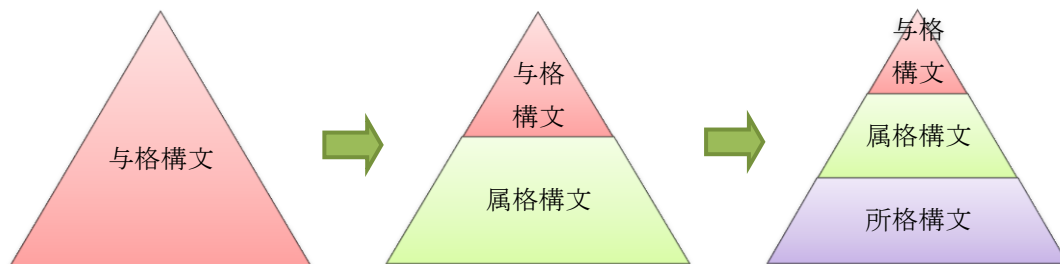


図 1 インド・アリア語の所有構文の変遷 (推定)

ヒンディー語ではこれらの所有構文が所有概念によって使い分けられており、典型的な所有 (具体的所有) は新たに発生した所格構文で、分離不可能所有は属格構文で、非典型的な所有 (抽象的所有) は最も古い与格構文で表される。このような複数の所有構文の使い分けは類型論的な傾向にも一致している⁷。しかし、現代ヒンディー語に見られるような所有構文の使い分けがいつごろから始まったのかについては不明であり、今後の研究課題としたい。

サンスクリット語とヒンディー語の文法を比較した土田 (1985) は、「古代より近代までの印度アリア語は、まことに長くこみいった変遷のあとを辿りきたり、少なくとも単語の組成と形態より見れば、両者はほとんどその相貌を異にしている」といってよいが、一方で、個々の構文的骨格乃至特徴が、

⁷ 多くの言語で属格構文は分離不可能所有を表す主要な手段になっており、他方、分離可能所有は他の構文で表される (Heine 1997: 67)。

さほどの変異を蒙ることなくほぼそのままに古代語より近代語に受け継がれていることが時おり見うけられる」(pp. 621-622)と述べている。インド・アリア語は時代が下るにつれ、(形態論的タイプが) 融合的な言語から膠着的な言語に変化したが、本稿で概観したように所有を格/後置詞と存在動詞で表す構文的骨格には変わりがない。所有構文は土田の指摘の一例と見なすことができる。

略号一覧

1=1人称; 2=2人称; 3=3人称; DAT=与格; EMPH=強調; F=女性; GEN=属格; LOC=所格; M=男性; N=名詞; N=中性; NEG=否定; NOM=主格; OBL=斜格; P=能動態; PFV=完了; PL=複数; PP=過去受動分詞; PRS=現在; SG=単数
(グロスのハイフン ‘-’ は形態素境界、等号 ‘=’ は接語境界を表す)

参考文献

- Bauer, Brigitte (2000) *Archaic Syntax in Indo-European*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Bubenik, Vit (1998) *A Historical Syntax of Late Middle Indo-Aryan (Apabhraṃśa)*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Bubenik, Vit (2007) “On the evolutionary changes in the Middle and New Indo-Aryan systems of case and adpositions (with special reference to European Romani)”. In: Colin P. Masica (ed.) *Old and New Perspectives on South Asian Languages: Grammar and Semantics*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- Coulson, Michael (2006) *Teach yourself Sanskrit*. Sevenoaks: Hodder & Srougton.
- Duroiselle, Charles (1997) *A Practical Grammar of the Pali Language*, Third edition. Buddha Dharma Education Association Inc (http://www.buddhanet.net/pdf_file/paligram.pdf).
- Heine, Bernd (1997) *Possession: Cognitive sources, forces, and grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 今村泰也 (2009) 「ヒンディー語の所有表現再考—類型論的観点からの考察—」『言語と文明』7: 17-39.
- 今村泰也 (2010) 「ヒンディー語・ウルドゥー語の他動詞 rakhnaa を用いた所有表現」『大阪大学世界言語研究センター論集』3: 261-283.
- Kachru, Yamuna (1980) *Aspects of Hindi Grammar*. New Delhi: Manohar Publications.
- Kachru, Yamuna (2006) *Hindi* (London Oriental and African Language Library 12). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- 古賀勝郎・高橋明 (編) (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』東京：大修館書店.
- Löfstedt, Bengt (1963) “Zum lateinischen possessiven Dativ”. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 78: 64-83.
- Mohanan, Tara (1994) *Argument Structure in Hindi*. Stanford, California: CSLI Publications.
- Nuchelmans, J. (1985) *Kleine Griekse Grammatica*. Weesp: Brand.
- Rosén, Haiim B. (1989) “A marginal note on Sanskrit case-syntax”. In: Subhadra Kumar Sen (ed.) *Hanjamana*. University of Calcutta Press. 33-39.
- Stassen, Leon (2009) *Predicative Possession*. Oxford : Oxford University Press.
- Taraporewala, Irach J.S. (1967) *Sanskrit Syntax*. Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- 土田龍太郎 (1985) 「ヒンディー語行為者名詞-vālā の迂説未来的用法」平川彰博士古稀記念会 (編) 『仏教思想の諸問題：平川彰博士古稀記念論集』611-626. 東京：春秋社.